

発表タイトル	日本近現代文学における「観相」言説研究へのアプローチ －「観相」は「科学」なのか－
発表者所属名	日本文学研究専攻
発表者氏名	屋代（高野）純子

【研究目的・方法】

本学の戦略的共同研究事業「観相資料の学際的研究」（注1）が、現在進めている調査の一つに日本の近現代文学における「観相」言説のデータ収集がある。この調査の開始時期は昨年度（2013）であり、調査は未だ継続中であるが、収集した用例は現時点で187例を数える。本発表はその中からデータを抽出し、言説分析を試みることで、日本近現代文学における「観相」言説研究へのアプローチをはかることを目的としている。（注2）

【発表概要】

「観相」とは、身体、容貌、声、気色を「人相見」（占い師）が観察し、その人の性質や運命の禍福を占う行為である。顔面を観る「面相」のみならず、手相占いなどもこれに含まれる。中国にルーツをもつ「相学」が半島を経由して日本に移入されたのは6世紀頃とされる。以後「観相」は、日本社会の中に深く浸透して行った。

論者は、近代に入ると「観相」による占い師の見立てを信じるのではなく、その非科学性を指摘する言説が増えるのではないかと調査開始当初予測していた。実際に明治20年代半ばには「人相見ノ如キモノハ人ノ顔色ヲ相シテ其思想ノ変化ヲ知ル所ノ観察力ニ富ンテ居ルモノテアル」（「妖怪学一斑」1891）と述べていた井上円了（注3）が、明治30年代後半には「骨相術は（中略）日本の人相ほどに甚（はなはだ）しからざるも其判断が餘り器械的にして、物差を以て精神を測るが如き有様なるは、笑ふべきの至りである、手相術は東西共に行はるゝも、是れ亦同様に信ずることは出来ぬ」（妖怪叢書 第4編『迷信解』1904）とする事例に認められるように、一人の学者の言説においても、「観相」評価は時代の変遷に伴って変化し、人を認識する手法としての信頼性を失って行く。

だが、人々が「観相」の実証性を疑い、批判することにより、近現代の文学表現から「観相」に関する言説が消失するののかというと、そうではなかった。「人相見」「観相」「手相」などをキーワードに、近現代文学の用例を収集していくと、意外にも、人物描写への援用、推理小説ジャンルとの親和性の強さ、さらには疑念や批判が「観相」のパロディ化に繋がり新たな文学表現を出現させている事例など、様々な表現のヴァリエーションが広がっていることが看取される。

例えば、海野十三（注4）「第四次元の男」（1940）では、身体が時々他者の視野から消失してしまう奇現象が起こることに悩んだ主人公が、観相師藤田に自分はどう見えるかと尋ねる。「観相」結果は「四次元の生物である」という、あり得ないものだった。「人相見の術は、科学なのである」と考えていた藤田は、この結果に「人相」術自体の信憑性を疑い、「人相見」の仕事を放棄する。

「観相」は果たして「科学」なのか。このような問いが近現代文学の「観相」言説の中から浮かび上がるという事象は、東アジア由来の「観相」が、西洋観相術、骨相学、犯罪心理学などと邂逅した、同時代の思潮の横断とも密接に関係すると考えられる。本発表は、このような歴史的な文脈をふまえて、日本近現代文学の「観相」言説を分析し、評価する。

【主要参考文献】

- 遠藤知巳「観相学的身体の成立—記号の系譜学に向かって」（1993・8「ソシオロギス」）
- 坪井秀人「猫の観相学—KNOW THYSELF?—」（『感覚の近代』2006・2 名古屋大学出版会 所収）
- 神尾達之「顔を見る/顔に見られる：観察主体の自立化と観察対象の脱他者化」（2012・2「早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）」）
- 相田満「人間観察から生まれた観相のもたらした文化と言説」（2013・4「輔仁大学外語学院日本語文学系」）ほか

(注1) 本事業は「観相」の知識体系が文学・絵画等の表現活動にいかなる影響を及ぼしたかについて研究を進めるもので、研究の補助線として、データベースの構築、情報学的・統計学的分析、また、東アジア、特に台湾・韓国の観相の実態調査等を行う学際的共同研究である。この共同研究の記事として「観相が切り開く学際研究」（2014・8 学融合推進センター「CPIS NEWS No.17」）がある。

<http://cpis.soken.ac.jp/project/publication/newsletter/pdf/no.17.pdf>

(注2) 本発表は、総合研究大学院大学 学融合研究事業 戦略的共同研究事業 I 「観相資料の学際的研究」（研究代表者 相田満）による 2013～2014 年度リサーチ・アシスタントとしての研究成果報告である。

(注3) 1858～1919 年。哲学、仏教、心理学の研究者であり、「真理は哲学にあり」の信念のもと、哲学教育の普及に努めた。1887 年、私立哲学館（後に東洋大学となる）を設立した。

(注4) 1897～ 1949 年。作品には、SF ミステリー、探偵小説、野球漫画等がある。また海野は早稲田大学理工学部電気科を 1923 年に卒業後、逓信省電気試験所に就職し、無線に関する研究に携わった経験を持つ。科学雑誌に解説記事を掲載することもあった。